



地震を前もって知る、観測態勢は整っているの

海底地震計が設置されている

日本は、世界の中でも地震の多い国です。南関東から東海地方にかけて、「東海地震」という、大地震が起こる可能性がある、と考えられています。

日本全国では、大地震を予知して、地震の災害を、できるだけ小さくしよう、という観測態勢は、まだじゅうぶんに、整っていません。しかし、「東海地震」に対する、観測態勢は、ある程度整っています。

気象庁では、1979年に、静岡県の御前崎から、南南西にのびる駿河トラフ(深い海底)の上に、110キロメートルの海底ケーブルを設置して、ケーブルの先と、そのとちゅうの4か所に、海底地震計をつなげました。

また、1985年に、相模湾トラフにそって、千葉県の勝浦から、沖合の日本海溝に向けて、約100キロメートルの、海底ケーブルを設置し、それに4か所の、海底地震計をつなげました。この海底地震計によって、大地震の前ぶれをとらえるための、観測をしています。

気象庁でデータ(情報)が集められる

関東・東海地方を中心に、地震の直前に現れる、土地のかたむきやのび縮み、土地のうきずみ、井戸水、地震活動など、地下の異常を調べる機械が、各地に備えつけられています。

この機械で観測された、データ(情報)は、気象庁に集められて、24時間監視されています。もし、海底地震計やこの観測から、大地震の前ぶれがわかれば、地震を予知することができます。(監修・国司 真)

